

『蜜月のつがい -花街オメガバース-』

著：高月まつり

ill：陵クミコ

石造りの立派な屋敷の豪華な部屋に連れてこられて、春雛は混乱している。初めて馬に乗れたのに楽しさなんて皆無だった。

「閨房に自分の寝室を使うのは初めてだ」

「……あの、翠様？」

「俺の本名は翠嵐という」

「翠嵐……？ あれ、どこかで聞いたことがある……？」

翠嵐の両手で頬を包まれた。

「俺の立場はそのうち分かるだろう。……お前を一目見て胸がときめいた。心臓が高鳴った。お前からはとてもいい香りがした。お前も俺と同じ思いのはずだ。なぜなら俺たちは『永遠の蜜月』だから」

何を言っているんだ、こいつ。

春雛は彼を見上げてしかめっ面をする。

そもそも初対面で翠嵐にときめくことなどなかった。

ただただ、強烈な違和感に冷や汗が流れて目眩が起こり、心臓が早鐘のように打ち鳴らされただけだ。きっとあのまま見つめていたら、気持ち悪さに倒れていただろう。

翠嵐が圧倒的な満月なので、新月の自分は気圧されたのだ。

「……そんなこと、あるもんか」

「永遠の蜜月を知らないのか？」

「知ってる！ 真夕兄さんが教えてくれた！ 満月と新月には、この世でたった一人の運命の相手がいるって。でもそれはおとぎ話だって知ってる。永遠の蜜月は、新月を慰めるための嘘だ」

首を嚙んだら番になるが、それ以上に、恋人がいても夫婦であっても、富も名誉も何もかもをかなぐり捨ててまで共にいたい相手が「永遠の蜜月」だという。

「柴胡領で見た」「どうやら水冠国にいるらしい」「私は西方の国と聞いた」と、噂は流れてきても、実際に出会ったことはない。

「俺も今まではそう思っていた。お前に会うまでは、そんなの迷信だと思っていた」

「じゃあ俺のせいだよ」

思わず言い返してしまった。

「そうだな。お前のせいだな。俺はそろそろ理性の限界だ」

頬を包んでいた翠嵐の指が、耳の後ろをゆるゆると撫で回す。

「やめろ」

「運命には抗えない」

「やめろ。触るな。俺は……そんな運命……」

指で触れられた場所が熱く疼き、胸の奥がきゅっと痛む。

股の間に熱が集まっていくのが分かったので体をよじって離れようとしても、翠嵐に押し倒されて肩を押さえつけられた。

「ああ……とてもいい香りがする。永遠の蜜月だと、こんなにも新月は香るものなのか」

耳に唇を押しつけられた途端に、春雛は抵抗できなくなった。

体が思うように動かないどころか、翠嵐を受け入れようと足が勝手に開いていく。

「春雛。下働きなんて本当は嘘だろう？」

着物をたくし上げられて太ももを撫でられる。

ほんの少し触れられただけで、春雛の体は満月を受け入れようと内側から変化した。下腹が熱くなって中がとろりと濡れていく。

翠嵐の指が、春雛の股間を包み込んだ下穿きに触れた。

「や、やだ、やめろ……、そんなこと、するな……っ」

「ここは遊郭の座敷ではないのだから、演技などいらんぞ？ 好きに囁けばいい」

「違う……っ、俺、こんなこと……っ、一度もしたことない……っ！」

荒い息を吐きながらの告白に、翠嵐の動きがピタリと止まった。

「……どういうことだ？」

「だから！ 俺は本当に下働きなんだっ！ 遊君じゃないっ！」

「遊郭で働く新月は、遊君として座敷に上がるのが一般的だろう」

「でも、俺は違う……っ」

体の中が熱くて苦しくてどうしていいか分からないほど気持ちが昂ぶっているときに、嘘なんて言えない。

視界が霞んで、自分が泣いているのだと分かった。

「泣くな泣くな。いきなり運命だなどと言ったから怖かったんだな？ こんなに心躍ることは初めてで、勢い余ってしまった。悪かったから泣き止んでくれ」

よしよしと、頭や頬を撫でられるのは赤ん坊になった気分だ。いつもの春雛ならば「離せ」と生意気なことを言っただろうが、翠嵐の手が思いのほか優しくかったのでされるままでいた。

「俺は……母さんの遺言と柊元屋のおとうさんの厚意で、座敷には上がってない」

「そうか……。柊元屋はお前の母にたいそうな恩義を受けたのだな」

「でも、俺は新月だから……いつまでも下働きじゃいけないと思ってるんだ」

「ならば、ちょうどよかったじゃないか。俺たちは運命の番だ」

「だから！」

春雛は両手で顔を擦りながら起き上がり、「運命じゃないし、番にもならないっ！」と大声を出す。

「頂を噛まない限り番にはならないし、俺は誰にも噛ませるつもりはない。あと、あんたのしていることは人さらい」

「いや……そこまで言われるようなことをしたか？ 俺が？ 柘元屋の主との取引は成立したんだが」

翠嵐は本当に分からないようで、首を傾げて春雛を見た。

「俺の気持ちを全く無視しやがって、そんな屈託のない顔をされても困る！」

「永遠の蜜月を前にしたら、個人の気持ちなど関係ない。それに、多幸福感に包まれてずっと傍にいたい離れたくないと感じて……」

「それ本当か？ ただの噂じゃないのか？ 現に俺は、目眩や吐き気、冷や汗が垂れて気持ち悪くなったぞ！ い、今だって、そのっ……できれば叫び声を上げてここから逃げたいくらいだ！」

言ってやった。

どれだけ酷いことをしたのかと、この満月に知らしめたかった。

すると翠嵐は小さなため息をついて春雛の脇に腰を下ろし、腕組みをした。

「……王都に留学中、永遠の蜜月の噂を聞いた」

「えっ！ 本物の永遠の蜜月に会ったのか？」

春雛はついさっき自分が放った言葉も忘れて、勢いよく翠嵐の顔を覗き込む。

「会ってはいない。噂だけだ。しかし、こんなにも噂が消えないのは、やはり本物がいるからこそなんだろうという結論に至った。そして今、俺は本能で確信した。なのにお前にとっては、俺は傍にいるのも辛いほど気持ちの悪い男か……？」

眉間にわずかに皺を寄せ、切なげな表情で問われてしまった。

いやそれ、気持ち悪いの「意味」が違うし……と言い返したかったが、それもなんだか違う気がした。

春雛は「あんたは綺麗だと思う」とそっぽを向いて取りあえずの事実を述べる。

「俺と違って綺麗だ。ははっ、なんで自分を攫った相手を慰めてんだろ、俺」

そんなことをしているよりも、さっさとこの寝室から外に出て深呼吸したい。

この部屋は、とても甘い匂いが充満して苦しい。

「啖呵を切る威勢のよさだけでなく、そういう可愛いところもあるんだな」

「は？」

「永遠の蜜月は諸刃の剣でもある」

翠嵐がその場にごろりと寝転び、春雛を見上げて小さく笑った。

「それは……どういう？」

「どんなに嫌いな相手、憎い相手であっても、永遠の蜜月と分かったら離れられない。地獄の生涯だ」

「そんなの……項を噛まなかったら番にならずに済むじゃないか」

「それができないんだよ。顔を見るのも嫌なのに噛まれたい。殺したいほど憎いののに噛んで傍に置きたい……そうなるんだそうだ」

春雛は、永遠の蜜月のいい話しか聞いたことがなかった。

そんな地獄のような組み合わせがあるなんて、にわかには信じられない。

「その顔は、『本当か?』と疑っている顔だな」

「だ、だって……そんな酷い永遠の蜜月の話なんて……聞いたことがない」

「まあほら、そういう番は心中してしまうからな。話も伝わりづらい」

翠嵐が「大学の書庫でその手の記録を読んだんだ」と言った。

心中と聞いて、収まっていたはずの冷や汗が流れだす。そういえば、ちょっと気持ちが悪い。

「記録は記録で当事者の心情は記載されていないから、どんなことを思って心中したのか分からないが、そういう輩に比べたら、俺たちはとても幸せな『運命』だと思わないか？」

「あんたのは『運命の勘違い』だ。俺はただの新月で、そんな凄いものじゃない。もう帰る」

「待て」

寝台から立ち上がったと思ったら、帯を掴まれて引っ張られた。

「離せっ！」

寝転がりながら翠嵐に蹴りをお見舞いするが、彼は最初こそ目を丸くしただけで、すぐに笑顔になった。

「ははは。元気がいい」

「うるせえっ！ 俺を笑うな！ あんたの玩具じゃねえんだよっ！」

今度は腕を振り回し、その腕が翠嵐の肩に当たった。

「あいたた。……満月に乱暴をする新月など初めてだ。やんちゃめ。どれ、俺も反撃するとしよう」

「ふざけるなっ！ 喧嘩でそうそう負けるかよ！」

追ってくる手を拳で叩き落として寝台から下りる。足が床に着いたと思ったらすぐに寝台に引き戻されるを何度か繰り返して、息をついた隙に肩を掴まれた。

そのまま反動で再び寝台に転がったとき、すでに春雛は翠嵐に押さえ込まれていた。

「ははっ！ この野郎！ 捕まえたぞ！ 着物の裾を乱していやらしいな……！」

「おいっ！」

「まあなんだ。お前が何も知らない初な下働きだというのは信じるよ。だが春雛、お前もいつまでも何も知らないままじゃ嫌だろう？」

楽しそうに目を細める翠嵐の言葉に、春雛は正直心が揺れた。

「ははは、凶星か」

「うるさい！ 俺は帰る！」

上機嫌に笑う翠嵐が憎らしくて、春雛は真っ赤な顔で「帰る！」を連発する。

「間違えた。……笑ったりして済まなかったな。今の俺は『永遠の蜜月』と出会えて本当に浮かれているんだ。春雛を怒らせたいわけじゃない」

「あんたが楽しそうなことは分かる。でも俺は……満月のあんたと一緒にいて熱砂になったなら面倒だなんて……。決まった相手がいないと凄く苦しい思いをするんだろう？ 苦しむところを人に見せたくない」

「俺に任せておけばいい。お前が心配することなんてこれっぽっちもないんだ」

「俺は……その、熱砂になったこと……ないから……だから、想像で言ってみただけ」

新月が数ヶ月に一度陥る「熱砂」を癒やす方法は、定期的に「熱砂丸」を飲む以外は満月との交合しかない。

新月の熱砂に誘惑された満月は、新月を抱くことしか考えられずに一週間から十日は寝食を忘れて交合し続ける。

しかしこれも、番がいればまったく問題なかった。

大変なのは独り身の新月だ。熱砂に陥ったら最後、体から溢れる誘惑の香りをどうにもできずに酷い目に遭う。

「よかった……。だがこれからは熱砂に怯えることはないぞ？ 俺がしっかり春雛の頂を噛んで番にしてやるからな？」

「俺はあんたとは……翠嵐さんとは番にならない。だって、番ってのはあれだろ？ いわゆる『夫婦』ってやつだろ？ 夫婦は好き合ったもの同士でなるんだ」

すると翠嵐が目を瞬いた。

「好きな相手とじゃなきゃ……俺は何もできない」

息が苦しくて胸の鼓動が高鳴る。

翠嵐に触れられているところが火傷をしたように熱く、そして腰がくすぐられるように疼くのを感じた。

だがこれは、圧倒的な満月に見下ろされているからだ。

自分を見下ろしている男には権力がある。そして美しい。けれど、春雛は恋に落ちなければ番にはなれない。

「そうか。だったら、まず、俺という満月を知ってもらわないとだめだな」

「そ、そうだな……」

「だから、俺にも春雛を教えてくれ。初めてなのは分かったから、信じられないほど優しく、いやというほど気持ちよくしてやろう」

知るって……そういう意味なのか。

春雛は首を左右に振ろうとして、翠嵐の右手に顎を掴まれた。

「お前は何もしなくていい。そのまま、俺に可愛がられている」

近づいてくる翠嵐の唇に、慌てて「誰かと接吻するのも初めてなんだ」と言ったら、翠嵐は喉の奥で笑って「それは嬉しい」と言った。

何もしなくていいと言われても、体は勝手に動いてしまう。これが新月の本能なのだと思わなければ、恥ずかしくて死にそうだ。

春雛は着ているものを脱がされて、今は足首に下穿きだった布を絡ませている。翠嵐を受け入れやすいように両脚を大きく広げて勃起した陰茎から先走りを滴らせ、後孔は愛液で蕩けていた。

「ほら、気持ちがいいだけで怖くないだろう？」

確かに翠嵐の接吻は、頭の中がぼんやりするほど心地いい。

けれど拙い自慰しか知らない春雛は、陰茎以外のところを愛撫されて感じる自分が信じられずに混乱していた。

「待って、待ってくれ、勝手に触るな……っ」

胸をまさぐられながら耳を舐められて、がくがくと腰が震える。耳に触れられて感じるなんて知らなかった。

「大丈夫だから感じていなさい。新月の体はそういうものだ。本能に抗うと辛いだけだからね？
春雛」

耳に口づけるような囁きと同時に乳首を指先で小刻みに弾かれて「あっ」と大きな声が出た。

今までそんな大きな声は堪えていたのに、一度出てしまうともうだめだ。

「あ、あっ、んんんっ、そこ、やだ……っ」

今度は両方の乳首を弾かれる。

初めて他人に触れられた場所は今は興奮して膨らみ、いやらしい硬さを晒した。

「本当に、あっ、だめ……っ、恥ずかしいから、やだ……っ」

「そうか？ 俺は春雛の表情を見られて嬉しい。もっと、いろんな顔が見たいな」

翠嵐の両手が胸から下腹に向かう。

今度は大事な場所を弄られるのだと思った春雛は、恥ずかしくて涙が零れそうになる。

だが翠嵐の手はそこではなく両脚の付け根に触れて、そこを優しく揉みだした。

親指が内股を押し、それ以外の指で付け根を撫でられる。

「はっ、あ、あああっ、あっ、あっ、や、だ、やっ……」

春雛がかぶりを振るたびに陰茎が揺れて先走りが飛び散った。翠嵐の手の甲にも滴が散ったが、彼は気にせず春雛を甘く責め立てる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>